



TITLE:

ごくまれな診断困難症例に遭遇して(随想)

AUTHOR(S):

辻, 一郎

---

CITATION:

辻, 一郎. ごくまれな診断困難症例に遭遇して(随想). 泌尿器科紀要  
1974, 20(6)

ISSUE DATE:

1974-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121678>

RIGHT:

## 随 想

### ごくまれな診断困難症例に遭遇して

北海道大学教授 辻 一 郎

泌尿器科を専攻して30余年になるが、いまだにどういふ最終診断にしたらよいか頭をかかえる症例が少なくない。このような例こそ報告していろいろな意見をききたいわけであるが、ときにはどのように報告してよいかわからずそのまま長く放置されていることもある。最近の数症例で最終診断がなかなか決まらなかった理由をふりかえてみるといろいろな場合がある。

まず第一は、すでに成書にも一独立疾患として位置づけられているにもかかわらずわれわれが不勉強でその疾患をよく知っていなかった場合である。例えば膀胱・尿道の限局性アミロイド症例で、原因不詳の血尿・膀胱症状・多発性尿道狭窄などを示し、尿道硬結の試片 H-E 標本でも診断がつかず困っていたが、ちょうど新着の日医師会誌のカラー頁で「多彩な臨床症状で診断困難な場合はアミロイド症を」という記載をみてさっそくアミロイド染色して診断が確定した。このような例では診断さえつけば以後の文献的調査および症例報告は比較的らくである。

つぎは従来の常識ではまず考えられないような症例である。出産直後からの血尿を主訴とする乳児で、腎盂欠損像と尿細胞診Ⅲ-Bを示し、手術摘出標本は典型的な腎盂移行上皮癌である。しかし幼児の腎盂癌はごくまれとされ、とくに1歳未満の報告は外国文献に1例あるのみである。この場合 Wilms 腫瘍との異同が当然問題となり、詳細な病理検査と世界的権威の承認が必要である。この例の病理診断は Dr. Mostofi によっても了承され、近く J. Urol. に発表されることとなっているが、臨床医学には例外が多く、あまりに常識にとられすぎではならないことを痛感させられた。

第三は、経験例が比較的まれな疾患に属するが、この疾患の症状・所見が多彩でその細分類・名称定義に異論が多い場合である。本年の日小外科学会で報告した乳児は、臨床像、IVP、膀胱レ線像では典型的な ectopic ureterocele を思わせたが、手術所見で膀胱

底部の嚢胞は膀胱・尿道への開口部が発見されず Stephens の分類の blind ureterocele に相当する。一方、この嚢と上方の拡張尿管との交通も肉眼的には不明で、この意味では膀胱重複奇形の一型とされている intravesical cyst にも似ている。しかし文献的に intravesical cyst とされている例も、原著をみるとその多くは最近の考えからすれば尿道内に開口する ectopic ureterocele とされるべきものようである。このような症例は現在のところありのままの所見を記載報告しておいて、どの疾患のどの型に属するかは将来の研究にまつしかないのである。

最後に最も取扱いに困るのは、臨床所見・各種検査、手術および病理組織所見を総合してみても、いったいこの例をどこに位置づけてよいか見当がつかぬ場合である。もちろん類似症例は従来の成書には記載されておらず、文献的にもどの項目を探してよいか分からない。このような症例の報告はむずかしいためしばしばそのまま放置され、時とともに忘れられてゆく可能性もある。しかしこのような症例こそ必ず記録を手もとにおいていつまでも頭のすみに残しておくことがわれわれの責任とと思っている。そうすればいつかはいわば偶然ともいえる機会に思わぬ解決のヒントを得たり、あるいはよく似た所見や症例の記載にめぐり合うことが多い。本年の西日本泌尿器科に報告した移行上皮癌構造を示す骨盤内嚢胞 transitional mesonephrogenic carcinoma の1例も、最初は全く見当がつかなかったが、骨盤内嚢胞の発生母地について調べているうちにたまたま Teilum の "Special tumors of ovary and testis" の中で卵巢の Brenner tumor が移行上皮構造を示すことがあるという記載をみつけ、これらを足場としてさらに文献的調査を続けた結果、いちおうわれわれなりの結論をまとめることができたわけである。

いずれにしても臨床医学の広さと深さは限りないことをとくに痛感してきている近ごろである。